



Title	母方言アクセントと移住先方言アクセント間の切り換え時に生じた逆転現象と平板型アクセント機能の解釈
Author(s)	余, 健
Citation	阪大日本語研究. 2001, 13, p. 89-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

母方言アクセントと移住先方言アクセント間の 切り換え時に生じた逆転現象と平板型アクセント機能の解釈

An Analysis of Reversion Phenomenon and of Monotone Accents'
Function on Code Switching Ability between Migrant Speakers'
Native Dialect and Migration Regions' Dialect

余 健
YEO Ken

キーワード：言語学的認知要因、心理学的認知要因、移住と言語変容、認識上の逆転現象、
平板型アクセント

【要旨】

福井県勝山市出身移住者で比較的首都圏在住歴の短い者の中に、母方言アクセントを発話する際に本来の移住先方言アクセントで発話し、逆に移住先方言アクセントを発話する際には、本来の母方言アクセントで発話する認識上の逆転現象を含む非規範的な切り換え現象が確認された。この現象には、言語学的認知要因、心理学的認知要因、認知要因以外の各要因群が相乗的に関与していることが明らかになった。また、移住先方言発話に確認された平板型アクセントには、東京語を志向しての発話機能があるといえるが、理解語彙に対する類推機能や仲間内の連帯感を高めるための機能も複合的に関与している可能性を指摘した。

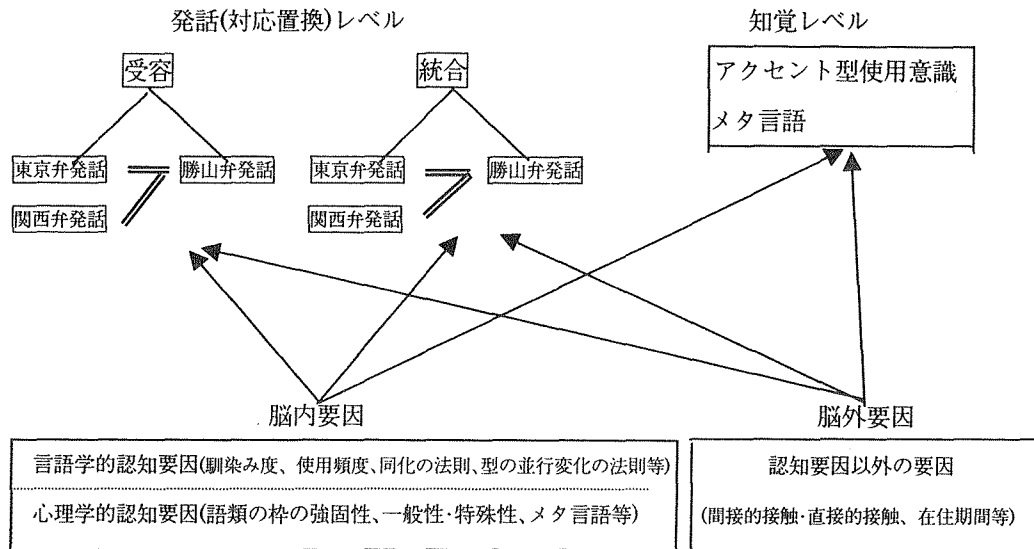
1. はじめに

1. 1. 本研究の枠組みと目的

最近の日本における移住先方言アクセントの受容研究としては、平山 (1978)、堀口 (1980)、杉藤・南 (1980)、下川 (1985)、西村 (1985) 等を挙げることができる。しかし各研究ともに対象としている移住者の移住前の状況は果たしてどうであったのだろうか。

本研究では、この疑問点を解決すべく、1997年3月に福井県立勝山高校を卒業した首都圏と関西圏への進学予定者 (全員18歳) を対象として移住前の段階を調査している。本稿では移住予定者、つまり勝山ネイティブと首都圏への移住者 (2.7~12.6年) について横断的・縦断的な調査に基づく考察を以下に示すような枠組みの中で行う (図1)。

まず、移住先アクセント (以下移住先ア) を発話レベルと型知覚レベルに分け、各レベ



(注)＝線部は、切り替えレベルを示す。

図1 本研究の枠組み

ルを以下に示すように下位分類する。発話レベルでは2拍名詞第2、3類における移住先ア(○●▽: 特殊的)の受容レベルと第4類における勝山式アの浮動状況(●○▽と○●▽: 共に一般的)から移住先ア(●○▽)への統合レベルに分ける。次に両レベルにおいて、母方言の勝山弁発話と移住先方言の東京弁発話に下位分類する。尚、後者の東京弁発話は真田(1993)で述べられている対応置換発話に相当する。その中において京阪式アクセントの第4類に現れた伝統型(○○▽)に対する新型(○●▽)はテレビからインプットされた東京式アクセント第4・5類(●○▽)に対応置換させて生成されたものではないかという指摘がある。この考え方にに基づき、移住前において移住先アクセント(東京式アクセント)に音声メディアを通して間接的に接触する状況下から、移住後の移住先アクセント(東京式アクセント)に直接的にも接触する状況下への変化、すなわち接触の質の変化に伴う母アクセントと移住先アクセント間の切り換え時に確認された認識上の逆転現象を含む非規範的な切り換え現象に関わる主要因間の相関性を明らかにすることが、本研究の第1の目的である。更に東京弁発話で確認された平板型アクセント機能について先行研究の解釈を踏まえた複合的な解釈を試みるのが本研究の第2の目的である。

1. 2. インフォーマント情報

総計37名の情報については表1に掲載されている。尚、被験者名はイニシャルで表し、性別(M or F)と共に掲載している。言語形成地は全員福井県勝山市で18～30歳まで

の青年層である。又、在京歴別に勝山市在住者群 (No. 1～No. 19)、短期在住者群 (No. 20～No. 29)、長期在住者群 (No. 30～No. 37) の三群に以下の考察では大別して扱う。尚、短期在住者群は、在京歴 2.7 年目から 4.4 年目までの人が含まれ長期在住者群には、7.1 年目から 12.6 年目までの人が含まれている。

又、勝山市在住者群の中には首都圏への移住予定者 (No. 11～No. 19) 9 名を含み、更にその内の No. 15～No. 19 の 5 名は首都圏への移住後、間もない者である。この 5 名はいずれも在京日数が 1 カ月以内の首都圏移住者であるが、東京式アの影響は極めて少ないものと考えられ、勝山市在住者群として扱っている。又、以下では勝山市在住者群を勝在者群、短期在住者群を短在者群、長期在住者群を長在者群と略式表記する。

また、上記の首都圏への移住予定者 (No. 11～No. 19) の内、No. 12～No. 19 の人には、移住前または移住直後の 1997 年 3 月から 4 月にかけての確認調査から、3 カ月後、6 カ月後、12 カ月後、18 カ月後、計 5 回の縦断調査を行っている。

1. 3. 調査項目と調査法

1. 3. 1 発話項目

佐藤(1988)を参考に 2 拍名詞第 1～第 5 類の中から、母音の広狭別に計 28 語の語彙を選定した。また、12 ヶ月目の段階から 2 拍名詞第 3 類の 5 語と第 4 類の 8 語、18 ヶ月目の段階から 3 拍名詞 9 語を追加している。発話項目では勝山弁発話→東京弁発話のセットを 2 回読ませている。尚、後者の東京弁読みにおいては「知っている限りの東京の言葉にして言ってください」と始めに教示している。又、調査時には語単独と文のセット、そして句はそのセットの読み上げ後に尋ねている。

表 1 インフォーマント一覧

被験者	在京歴	年齢	言語形成地	父の言成地	母の言成地	移住先	
1	TMF	0日	18	勝山市	勝山市	北海道	無し
2	NIF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
3	MOF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
4	TNF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
5	SSF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
6	YTF	0日	18	勝山市	勝山市	大阪府	無し
7	MFM	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
8	MMM	0日	18	勝山市	丸岡市	大野市	無し
9	SMM	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
10	ANF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	無し
11	YYF	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	千葉県
12	JSM	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
13	TKM	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
14	HTM	0日	18	勝山市	勝山市	勝山市	千葉県
15	KOF	5日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
16	MMF	14日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
17	HSM	15日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
18	TSM	15日	18	勝山市	勝山市	勝山市	埼玉県
19	HSM	22日	18	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
20	ROM	2.7年	21	勝山市	勝山市	大野市	東京都
21	KIF	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	埼玉県
22	NYM	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	神奈川県
23	MTM	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
24	HKM	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	神奈川県
25	EYF	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	埼玉県
26	TWM	3.1年	21	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
27	KFM	4.1年	21	勝山市	大阪府	勝山市	千葉県
28	HKM	4.1年	21	勝山市	大野市	大分県	神奈川県
29	JKF	4.4年	27	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
30	HAM	7.1年	27	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
31	MSF	7.1年	25	勝山市	勝山市	勝山市	東京都
32	YTF	7.1年	25	勝山市	勝山市	石川県	神奈川県
33	TYM	9.3年	27	勝山市	勝山市	勝山市	埼玉県
34	YYM	9.3年	27	勝山市	勝山市	勝山市	神奈川県
35	TIM	10.3年	28	勝山市	勝山市	勝山市	神奈川県
36	JIF	10.4年	27	勝山市	勝山市	勝山市	千葉県
37	HMM	12.6年	30	勝山市	勝山市	勝山市	東京都

1. 3. 2. 東京語の音調に対するメタ言語を問う項目

表2 メタ言語

被験者	在京歴	マモマ	ミムム	オトガ	イヌガ	ハリガ	アトガ
20 ROM	2.7年	●○○	○●●	○●●	○●●	○●●	○●●
21 KIF	3.1年	○	○	○	○	○	○
22 NYM	3.1年	○	○	○	○	○	○
23 MTM	3.1年	○	○	○	○	○	○
24 HKM	3.1年	○	○	○	○	○	○
25 EYF	3.1年	○	○	○	○	○	○
26 TWM	3.1年	○	○	○	○	○	○
27 KFM	4.1年	○	○	○	○	○	○
28 HKM	4.1年	○	○	○	○	○	○
29 IKF	4.4年	○	○	○	○	○	○
30 HAM	7.1年	○	○	○	○	○	○
31 MSF	7.1年	○	○	○	○	○	○
32 YTF	7.1年	○	○	○	○	○	○
33 TYM	9.3年	○	○	○	○	○	○
34 YYM	9.3年	○	○	○	○	○	○
35 TIM	10.3年	○	○	○	○	○	○
36 JIF	10.4年	○	○	○	○	○	○
37 HMM	12.6年	○	○	○	○	○	○

注)○印で示された方のアクセント型がより「東京的な音調」として捉えられたことを示す。

3拍無意味語と第4類の各2語は●○▽と○●▽の対、第2、3類の各2語は○●▽と○●▽の対、計6語の句音調についてどちらの方が東京的に聞こえるか尋ねている。表2の結果は、短期在住者群と長期在住者群のみを対象とした結果である。縦断調査対象者には、移住後6ヶ月目の段階から実施している。尚、各刺激対を読み上げる際は、1拍当たりの高さ・強さ・時間をなるべく一定にして筆者が読み上げたもの（各語2度づつ）を聞いてもらっている。

1. 4. アクセントが変化する際に選択される要因群

アクセントが変化する際の要因が、単独でないことは秋永（1957）で早くから指摘されている。図2で示すような「語彙」「場」「時」「人」を頂点とした「三角錐」の4点及び6辺の相互関係により決定され、それによってアクセント変化の推移が確認されるとしている。さらに、相澤（1984）では、体系そのものに变化をもたらす音韻変化の方が、そうではない形態変化よりも重要であるとしている。そして、その両者の変化には次の2つの要因を分けて考える必要があるとしている。

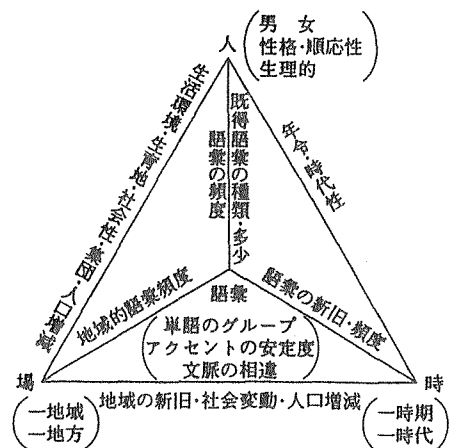


図2 秋永（1999）より抜粋

- (A) 変化そのものを引き起こす原因として潜在的に働きかける背後的要因。＝内発的要因
 (B) 変化が起こり新しいアクセントが生まれ一社会に浸透していく過程で関与する具体的要因。＝外発的要因

金田一（1974）では、(A) に相当する内発的要因として次の4点を指摘している。

- (1) 発音を容易ならしめる欲求
- (2) 記憶の負担を軽減する欲求
- (3) 発音を明瞭・明晰ならしめる欲求
- (4) 言語単位の自己統一を明瞭・明晰ならしめる欲求

しかし、本稿で取り扱う勝山式アクセント（表3）と東京式アクセント（表4）間における2拍名詞を中心とした形態論的な変化においては、上記4点の内発的な要因に加えて上記の(B)に相当する2点の外発的な要因も強く関与しているといえるだろう。

表3 勝山式アクセントの体系

類	勝山式ア
1・4	○●▽
2・3・5	●○▽

表4 東京式アクセントの体系

類	東京式ア
1	○●▽
2・3	○●▽
4・5	●○▽

注)各○は低い音を●は高い音を示す。▽は助詞の低音を、▼は助詞の高音を表す。

- ① 移住先の使用言語である東京式アクセントは、普段音声メディアを通して大量に接していて耳慣れている。
- ② 移住先の使用言語である東京式アクセントは、日本の首都、又その周辺で使われている威信の高い変種である。

上述した言語変化を引き起こす際の背景的な要因に相当する内発的要因4点と外発的要因2点に加えて、図1に示すような言語変化を引き起こす際により具体的に関わる従来の言語内的な要因に対応する言語学的認知要因、心理学的認知要因と従来の言語外的な要因に対応する認知要因以外の要因の各要因群を挙げられる。まず、言語学的認知要因とは、金田一（1973）で触れられている同化の法則や型の並行変化の法則、秋永（1999）で触れられている馴染み度の要因等を挙げることができる。つまり、言語学的認知要因とは、在来者を対象にしたアクセント変化に関わる要因として扱われることの多い要因群といえよう。つぎに、心理学的認知要因とは、余（1998、1999）で扱われてきた語類の枠の強固性、一般性・特殊性、メタ言語等の特に移住者の移住先アクセント受容に関わる要因群を指す¹⁾。尚、語類（類別語彙）の枠の強固性と一般性・特殊性の要因については、次節の1.5. 節で具体的な説明を加える。

また、上述した言語学的、心理学的認知要因が、大きく脳内における作用といえるのに対し、認知要因以外の要因とは大きく脳外での作用による要因といえる。後者の要因につ

いては、テレビを中心とした音声メディアからのインプットによる移住先ア（東京式ア）との一方的で受動的な接触すなわち、間接的接触要因と移住後、人的接触を伴う移住先ア（東京式ア）との直接的接触要因、在住年数といった要因を挙げることができる（図1）。

1. 5. 勝山式アクセントと東京式アクセントの特徴

平山（1953）による約50年前の勝山式アクセントは表3に、又インフォーマントの移住先である首都圏の東京式アクセントは、表4に示されている。この両表の対応関係から2拍名詞における伝統的勝山式アクセント体系についての特徴を以下に示す。

- (1) 式（高起・低起）が存在せず、東京式アクセントに近い体系である。
- (2) 尾高型（○●▽）が存在しない2型アクセントで、アクセント核の有無だけが弁別特徴である。

一方、余調査（1997）では第4類においてのみ表5（No. 1～No. 19）で示すように○●▽と○●▼間で揺れが確認されたが、体系的には約50年前の簡略化された接触アクセント体系をほぼ受け継いでいると言えよう。また、18ヶ月目の縦断調査から追加した3拍名詞の体系も、尾高型（○●●▽）が存在しないという点では2拍名詞と同様な特徴を持っている。

さらに、2拍名詞第4類にのみ確認される揺れは、東京式アを強く意識しての結果であると考えられる。

なぜなら、言語学的認知要因群の一要因である型の並行変化に基づいて勝山式

表5 勝山弁読み上げ時における第4類の結果（第1回目）

			針		跡		糸		今		息		肩		簪		海		東ア度	
	被験者	在京歴	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点	
1	TMW	0日	0	0	1	1	0							2	0	2		10	62.50%	
2	NIW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					4	25.00%	
3	MOW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0		6	37.50%	
4	TNW	0日	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		3	18.75%	
5	SSW	0日	1	1	1	1	0	0	0	0	0				0	0	0	10	62.50%	
6	YTW	0日		0			0	0	0	0	0	0						9	56.25%	
7	MFM	0日	1	0												0		14	87.50%	
8	MMM	0日	0	0	0		0	0	0	2	0	2					2	7	43.75%	
9	SMM	0日	0	0	0	0	0	0	0				0	0		0		6	37.50%	
10	ANW	0日	0	0		0	0	0	0	0	0	0			0	0		4	25.00%	
11	YYW	0日	0	0	0		0	0	0		0	0	0					8	50.00%	
12	JSM	0日	0					0							0			13	81.25%	
13	TKM	0日	1	0	0		0	0					0		0			10	62.50%	
14	HTM	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0		0	0		13	81.25%	
15	KOW	5日	1	2	1	1	0		0						0			12	75.00%	
16	MMW	14日	0	0	0	0	0	0	0	0				0	0			7	43.75%	
17	HSM	15日	0	0	0		0		0	0	0				0	0		8	50.00%	
18	TSM	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	0	0	5	31.25%	
19	HSM	22日	0	0	0	0	0	0	0				0	0	0	0		5	31.25%	
平均																			8.11	50.66%
20	ROM	2.7年	0	1	0	1	0	0	0	0	2	1			0			8	50.00%	
21	KIW	3.1年	1	1	1	1	0	0	0	1	2	1			0	2	0	2	9	56.25%
22	NYM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		2	12.50%	
23	MTM	3.1年	0	0	1	0	0	0	—	0	1	1	0	0	0	0	2	4	26.67%	
24	HKM	3.1年	0	0	1	0	0	0	0	1	0				0	0		8	50.00%	
25	EYW	3.1年	1	1	0	1	0	1			2	1	0	2				11	68.75%	
26	TWM	3.1年	1	2	1	2	0	0	0	0	2	1	2		2			6	37.50%	
27	KFM	4.1年	1	0	0	0	0	0	0	0			0	0	0			5	31.25%	
28	HKM	4.1年	1	1	1	1	1	0										15	93.75%	
29	IKW	4.4年	0	1	0	2	0	0	0	0	0	2	0		0	0		4	26.67%	
平均																			7.20	45.33%
30	HAM	7.1年	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0		0		12	75.00%	
31	MSW	7.1年	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	26.67%	
32	YTW	7.1年	0	1	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13	81.25%	
33	TYM	9.3年	1	1	1	1	0	0	1	1	1	1	1		0			13	81.25%	
34	YYM	9.3年	0	2	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0		11	68.75%	
35	TIM	10.3年	1	2	1	2	1	0	1		2		2				2	10	62.50%	
36	JIW	10.4年	1	1	0	0	1	0	0	0	1			0	0		0	8	50.00%	
37	HMM	12.6年	1	1	0	2	0	1	0	2	0	2	0	2			2	6	37.50%	
平均																			9.63	60.37%

注)0=○●▼、1=○●▽、2=○●▽を指す。各○は低い音を●は高い音を示す。▽は助詞の低音を、▼は助詞の高音を表す。色付き部は東京式アクセント回答箇所を指す

ア体系内だけで考えるのであれば、第1類においても同様な揺れが確認されて良いはずである。しかし第1類においては●○▽と○●▼間での揺れは確認されず、東京式アと同型の○●▼で非常に安定している(表6)。上記の点より勝山式ア・東京式ア間における2拍名詞の語類間の中でも第1類と第4類間における枠組みは、かなり強固であると言えよう。言い換えると現代の若年層においても語類の枠組みは心理学的に実在しているといえ、勝山式の伝統的な第4類(○●▼)が音声メディアを通じ、東京式の第4類(●○▽)の影響を受けることで勝山式の第4類に揺れ(●○▽、○●▼)が確認されても、語類間の枠組みの独立性が高い故、第1類(○●▼)には第4類に現れた●○▽が波及しないと述べるができる。上記の状況から確認される要因が、前節の1. 4. 節で述べた語類の枠の強固性に相当する要因である。この点は以下で述べることの前提になる。

また、この語類の枠の強固性に基づき、前節で挙げた特殊性・一般性という心理学的認知要因については、以下のように定義付けされる。すなわち表3の母ア体系(勝山式ア)と表4の移住先ア体系(東京式ア)間における語類の対応関係上、頭高型(●○▽)と平板型(○●▼)の両型は、一般性を持ち東京式的特徴が比較的薄いと言える。なぜなら、●○▽と○●▼は、母ア体系・移住先ア体系の両体系において、量的な観点に基づき各語類を代表する型と認定できるためである。一方、尾高型(○●▽)は特殊性を持ち東京式的特徴が比較的濃いと言える。なぜなら第2、3類において、移住先ア体系においてのみ量的に代表的な型と認定できるからである。

表6 勝山弁読み上げ時における第1類の結果(1回目)

			顔		水		風		庭		鳥		東ア度	
被験者	在京歴	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点	満点	
1 TMW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
2 NIW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
3 MOW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
4 TNW	0日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	9	90.00%	
5 SSW	0日	0	L	0	L	0	L	0	0	0	L	6	60.00%	
6 YTW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
7 MFM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
8 MMM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
9 SMM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
10 ANW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
11 YYW	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
12 JSM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
13 TKM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
14 HTM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
15 KOW	5日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
16 MMW	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
17 HSM	15日	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	9	90.00%	
18 TSM	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
19 HSM	22日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
										平均		9.68	96.84%	
20 ROM	2.7年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
21 KIW	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
22 NYM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
23 MTM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
24 HKM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
25 EYW	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
26 TWM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
27 KFM	4.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
28 HKM	4.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
29 IKW	4.4年	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	9	90.00%	
										平均		9.90	99.00%	
30 HAM	7.1年	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	9	90.00%	
31 MSW	7.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
32 YTW	7.1年	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	9	90.00%	
33 TYM	9.3年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	9	90.00%	
34 YYM	9.3年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
35 TIM	10.3年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
36 JIW	10.4年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
37 HMM	12.6年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	100.00%	
										平均		9.63	96.25%	

注)0=●○▽、1=●○▽、2=○●▼、L=○●▼を指す。各○は低い音を●は高い音を示す。▽は助詞の低音を、▼は助詞の高音を表す。

2. 切り換え能力の結果

2. 1. 受容レベル（第2、3類）における横断調査の結果

表7 受容レベル（第2、3類）における切り替え率の結果

被験者	在京歴	(1回目)第2類		(1回目)第3類		(2回目)第2類		(2回目)第3類	
		勝山読み	東京読み	勝山読み	東京読み	勝山読み	東京読み	勝山読み	東京読み
1 TMF	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
2 NIF	0日	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
3 MOF	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
4 TNF	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	0.00%
5 SSF	0日			40.00%	60.00%	20.00%	0.00%	20.00%	0.00%
6 YTF	0日	60.00%	70.00%	60.00%	90.00%	90.00%	70.00%	70.00%	90.00%
7 MFM	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	0.00%
8 MMM	0日	10.00%	20.00%	0.00%	30.00%	30.00%	20.00%	10.00%	0.00%
9 SMM	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
10 ANF	0日	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%
11 YYF	0日	10.00%	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%
12 JSM	0日	20.00%	40.00%	30.00%	50.00%	30.00%	30.00%	50.00%	40.00%
13 TKM	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%
14 HTM	0日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	20.00%
15 KOF	5日	20.00%	20.00%	0.00%	30.00%	20.00%	30.00%	0.00%	0.00%
16 MMF	14日	0.00%	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	10.00%	0.00%
17 HSM	15日	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
18 TSM	15日	0.00%	20.00%	0.00%	20.00%	20.00%	30.00%	20.00%	0.00%
19 HSM	22日	10.00%	20.00%	10.00%	20.00%	20.00%	10.00%		
	平均	9.47%	11.05%	7.37%	16.32%	14.21%	10.53%	11.05%	8.95%
20 ROM	2.7年	80.00%	90.00%	70.00%	80.00%	80.00%	70.00%	90.00%	100.00%
21 KIF	3.1年	60.00%	70.00%	60.00%	80.00%	60.00%	70.00%	70.00%	90.00%
22 NYM	3.1年	10.00%	10.00%	20.00%	10.00%	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%
23 MTM	3.1年	90.00%	100.00%	70.00%	70.00%	100.00%	90.00%	100.00%	100.00%
24 HKM	3.1年	50.00%	20.00%	70.00%	20.00%	50.00%	30.00%	40.00%	30.00%
25 EYF	3.1年	40.00%	70.00%	60.00%	50.00%	0.00%	30.00%	80.00%	20.00%
26 TWM	3.1年	50.00%	0.00%	70.00%	50.00%	10.00%	0.00%	30.00%	20.00%
27 KFM	4.1年	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%	0.00%	20.00%	0.00%	0.00%
28 HKM	4.1年	50.00%	90.00%	50.00%	100.00%	80.00%	70.00%	70.00%	90.00%
29 IKF	4.4年	80.00%	90.00%	80.00%	100.00%	100.00%	90.00%	100.00%	90.00%
	平均	51.00%	54.00%	55.00%	57.00%	61.00%	50.00%	58.00%	57.00%
30 HAM	7.1年	80.00%	80.00%	60.00%	60.00%	90.00%	80.00%	80.00%	80.00%
31 MSF	7.1年	0.00%	50.00%	0.00%	80.00%	20.00%	90.00%	10.00%	100.00%
32 YTF	7.1年	20.00%	20.00%	10.00%	10.00%	10.00%	0.00%	10.00%	0.00%
33 TYM	9.3年	80.00%	100.00%	10.00%	100.00%	100.00%	100.00%	90.00%	100.00%
34 YYM	9.3年	80.00%	80.00%	80.00%	90.00%	100.00%	80.00%	100.00%	100.00%
35 TIM	10.3年	90.00%	100.00%	100.00%	100.00%	90.00%	100.00%	100.00%	100.00%
36 JIF	10.4年	10.00%	50.00%	0.00%	70.00%	30.00%	90.00%	40.00%	90.00%
37 HMM	12.6年	60.00%	60.00%	70.00%	90.00%	70.00%	80.00%	60.00%	90.00%
	平均	52.50%	67.50%	41.25%	75.00%	63.75%	77.50%	61.25%	82.86%

注)色の濃い部分は、認識上逆転現象を示している個所を指し、色の薄い部分は規範上正しい切り換えられている個所を指す。表7、10共にいずれも30.0%差以上を基準としている。

表7は母アクセント（勝山弁発話）と移住先アクセント（東京弁発話）間における個人別と群別の受容度（第2、3類）を示している（1、2回目共）。始めに、受容レベルにおける切り換え能力を検討する。表中の薄い黒塗りの部分は、移住先ア（○●▽）の出現する頻度において規範上自然なパターン（勝山弁発話＜東京弁発話）となっている箇所を

示す。又濃い黒塗りの部分は、移住先ア（○●▽）の出現する頻度において規範上不自然な頻度パターン（勝山弁発話＞東京弁発話）、つまり認識上の逆転現象を引き起こしている箇所を示している。尚、いずれも勝山弁発話・東京弁発話間で30%以上の回答率差があった箇所である。

まず、表7において第2、3類の1、2回目を通して、どちらか片方か又は両回共30%以上の回答率差を以って切り換えている人は勝在者群においてはNo. 5, 6, 8, 15, 19で26.32%（5/19名）、勝在者群においてはNo. 24~26, 28, で40.00%（4/10名）、長在者群においてはNo. 31, 33, 表8 東京弁発話時における第2類の結果（1回目）

36, 37で50.00%（4/8名）を示している。つまり移住することで量的には受容レベルにおける切り換え能力を高めた人の存在が相対的にはあるが想定される。しかし、ここで内容に目を向けてみると勝在者群から短在者群と長在者群間で異なった状況が確認される（表7、8）。換言すると、表7において前者の勝在者群から短在者群では、No. 5, 19, 24~26の55.56%（5/9名）、つまり切り換えている人の約半数において、移住先アの出現する頻度パターンが勝山弁発話＞東京弁発話となる認識上の逆転現象を引き起こしている。

一方、この認識上の逆転現象は長在者群には見当たらず、代って勝山弁発話＜東京弁発話のパターンがNo. 31, 33, 36, 37の100%（4/4名）、つまり切り換えている人の全員において確認される。つまり勝山弁発話＞東京弁発話という、非規範的な移住先ア（○●▽）の頻度パ

		音		石		夏		胸		冬		東ア度	
被験者	在京歴	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点	
1 YTF	0日	1	2	0	2	1	1	0	2	0	2	7	70.00%
2 JSM	0日	0	1	1	2	1	2	1	2	1	1	3	40.00%
3 SSF	0日	1	1	1	1	1	L	0	0	0	L	2	20.00%
4 MMM	0日	1	2	2	2	1	1	1	1	2	1	2	20.00%
5 KOF	5日	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	2	20.00%
6 TSM	15日	1	0	1	2	1	1	1	2	1	1	2	20.00%
7 HSM1	22日	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	2	20.00%
8 ANF	0日	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	10.00%
9 MMF	14日	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10.00%
10 TMF	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
11 NIF	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
12 MOF	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
13 TNF	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
14 MFM	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
15 SMM	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
16 YYF	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
17 TKM	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
18 HTM	0日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
19 HSM2	15日	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
										平均	1.16		11.58%
20 MTM	3.1年	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	10	100.00%
21 ROM	2.7年	0	2	0	2	0	2	0	2	1	2	9	90.00%
22 HKM	4.1年	0	2	0	2	0	2	0	2	0	1	9	90.00%
23 IKF	4.4年	0	0	0	2	0	2	0	2	0	2	9	90.00%
24 KIF	3.1年	0	1	0	2	0	2	0	2	1	1	7	70.00%
25 EYF	3.1年	1	2	1	2	0	2	0	2	1	2	7	70.00%
26 HKM	3.1年	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	2	20.00%
27 NYM	3.1年	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	10.00%
28 TWM	3.1年	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
29 KFM	4.1年	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0.00%
										平均	5.40		54.00%
30 TYM	9.3年	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	10	100.00%
31 TIM	10.3年	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	10	100.00%
32 HAM	7.1年	1	2	0	2	0	2	1	2	0	2	8	80.00%
33 YYM	9.3年	1	0	0	2	0	2	0	2	0	2	8	80.00%
34 HMM	12.6年	1	1	1	1	0	2	0	2	0	2	6	60.00%
35 MSF	7.1年	0	2	0	2	1	1	0	0	1	1	5	50.00%
36 JIF	10.4年	1	2	0	2	0	1	1	2	1	1	5	50.00%
37 YTF	7.1年	1	0	0	1	1	1	1	1	0	1	2	20.00%
										平均	6.75		67.50%

注0=○●▽、1=●○▽、2=○●▽、L=○●▽を指す。各○は低い音を●は高い音を示す。▽は助詞の低音を、▼は助詞の高音を表す。

ターンから勝山弁発話<東京弁発話という規範的な移住先ア(○●▽)の頻度パターンに推移していく過程が想定される。

2. 2. 統合レベル(第4類)における横断調査の結果

次に統合レベル(第4類)における切り換え能力について検討する(表9)。まず、勝在者群において30%の回答率差を以って、切り換えている人は、No. 5, 12, 14で15.79%(3/19名)を占めている。次いで短在者群においては、No. 20, 23, 26, 29で40.00%(4/10名)、長在者群においては、No. 31, 35, 36, 37で50.00%(4/8名)に達している。量的には、接触の質の変化つまり移住後、直接的に接触する機会が増えることで切り換えられる人が相対的に増えると言えそうである。

そして、受容レベルの勝在者群・短在者群には確認された認識上における逆転現象は、統合レベルにおいては勝在者群のNo. 5に確認されるのみである(表9、10)。つまり、集団レベルにおいて量的には、受容レベルと統合レベルでの切り換えにおいて差異は見られないが、内容的には統合レベルの方が、受容レベルより早く規範的に切り換えられるようになると言えそうである。また、短在者群の4名(KIF、HKM、NYM、KFM)においては、移住先である東京式アに対するメタ言語の反映と考えられる平板型(○●▼)の発話が多く確認される。

表9 統合レベル(第4類)における切り替え率の結果

被験者	在京歴	(1回目)第4類		(2回目)第4類	
		勝山読み	東京読み	勝山読み	東京読み
1 TMF	0日	62.50%	68.75%	75.00%	75.00%
2 NIF	0日	25.00%	25.00%	12.50%	25.00%
3 MOF	0日	37.50%	37.50%	25.00%	43.75%
4 TNF	0日	18.75%	43.75%	37.50%	56.25%
5 SSF	0日			50.00%	50.00%
6 YTF	0日	56.25%	43.75%	18.75%	25.00%
7 MFM	0日	87.50%	81.25%	68.75%	75.00%
8 MMM	0日	43.75%	50.00%	43.75%	68.75%
9 SMM	0日	37.50%	37.50%	50.00%	37.50%
10 ANF	0日	25.00%	31.25%	18.75%	43.75%
11 YYF	0日	50.00%	37.50%	31.25%	31.25%
12 JSM	0日	81.25%	81.25%	88.75%	100.00%
13 TKM	0日	62.50%	81.25%	75.00%	93.75%
14 HTM	0日	81.25%	81.25%	50.00%	81.25%
15 KOF	5日	75.00%	62.50%	81.25%	68.75%
16 MMF	14日	43.75%	43.75%	43.75%	31.25%
17 HSM	15日	50.00%	62.50%	56.25%	75.00%
18 TSM	15日	31.25%	37.50%	43.75%	56.25%
19 HSM	22日	31.25%	25.00%	31.25%	43.75%
	平均	50.66%	50.66%	46.38%	56.91%
20 ROM	2.7年	50.00%	93.75%	62.50%	62.50%
21 KIF	3.1年	56.25%	50.00%	56.25%	56.25%
22 NYM	3.1年	12.50%	25.00%	18.75%	18.75%
23 MTM	3.1年	26.67%	87.50%	6.25%	100.00%
24 HKM	3.1年	50.00%	31.25%	37.50%	43.75%
25 EYF	3.1年	68.75%	87.50%	50.00%	62.50%
26 TVM	3.1年	37.50%	87.50%	50.00%	62.50%
27 KFM	4.1年	31.25%	50.00%	50.00%	25.00%
28 HKM	4.1年	93.75%	93.75%	81.25%	100.00%
29 IKF	4.4年	26.67%	68.75%	43.75%	75.00%
	平均	45.33%	67.50%	45.63%	60.63%
30 HAM	7.1年	75.00%	75.00%	75.00%	75.00%
31 MSF	7.1年	26.67%	68.75%	31.25%	62.50%
32 YTF	7.1年	81.25%	75.00%	75.00%	81.25%
33 TYM	9.3年	81.25%	87.50%	87.50%	81.25%
34 YYM	9.3年	68.75%	87.50%	56.25%	75.00%
35 TIM	10.3年	62.50%	93.75%	62.50%	93.75%
36 JIF	10.4年	50.00%	87.50%	75.00%	93.75%
37 HMM	12.6年	37.50%	100.00%	62.50%	100.00%
	平均	60.37%	84.38%	65.63%	82.81%

注)色の濃い部分は、認識上逆転現象を示している個所を指し、色の薄い部分は規範上正しく切り換えられている個所を指す。

2. 3. 縦断調査の結果

2. 3. 1. HTMとKOFにおける受容レベル(第2、3類)の結果

本節では横断調査(2. 1. 節)における3年1ヶ月以内の人に確認された認識上の逆転現象が、同様に認められるHTMと横断調査では確認されなかった6ヶ月以内の比較的

表 10 東京弁発話時における第 4 類の結果 (1 回目)

被験者	在京歴	針	跡	糸	今	息	肩	箸	海	東ア度
		単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
1 YTF	0日	0	0	0	0	0	1	1	1	7 43.75%
2 JSM	0日	0	1	1	1	2	2	1	1	13 81.25%
3 SSF	0日	0	0	0	L	0	0	0	L	5 31.25%
4 MMM	0日	1	1	2	2	1	2	2	1	8 50.00%
5 KOF	5日	0	0	0	0	1	0	1	0	10 62.50%
6 TSM	15日	0	0	1	0	0	0	2	2	6 37.50%
7 HSM1	22日	0	0	0	0	0	0	0	2	4 25.00%
8 ANF	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	5 31.25%
9 MMF	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	7 43.75%
10 TMF	0日	0	0	1	0	1	1	0	1	11 68.75%
11 NIF	0日	2	2	0	0	0	0	0	0	4 25.00%
12 MOF	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	6 37.50%
13 TNF	0日	0	0	0	0	0	1	0	0	7 43.75%
14 MFM	0日	0	0	1	1	0	1	1	1	13 81.25%
15 SMM	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	6 37.50%
16 YYF	0日	0	0	0	0	0	0	0	0	6 37.50%
17 TKM	0日	0	0	0	1	1	1	1	1	13 81.25%
18 HTM	0日	0	0	1	1	1	1	1	1	13 81.25%
19 HSM2	15日	0	0	1	0	0	1	0	0	10 62.50%
平均										8.11 50.66%
20 MTM	3.1年	1	1	0	0	1	1	1	1	14 87.50%
21 ROM	2.7年	1	1	1	1	1	0	1	1	15 93.75%
22 HKM	4.1年	1	1	1	2	1	1	1	1	15 93.75%
23 IKF	4.4年	0	1	0	0	2	2	1	1	11 68.75%
24 KIF	3.1年	1	1	0	0	0	0	1	1	8 50.00%
25 EYF	3.1年	1	1	0	1	1	1	2	2	14 87.50%
26 HKM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	5 31.25%
27 NYM	3.1年	0	0	0	0	0	0	0	0	4 25.00%
28 TWM	3.1年	1	1	0	1	1	1	1	2	14 87.50%
29 KFM	4.1年	0	0	0	0	0	0	1	1	8 50.00%
平均										10.44 65.28%
30 TYM	9.3年	1	1	2	1	1	1	2	1	14 87.50%
31 TIM	10.3年	1	1	0	1	1	1	1	1	15 93.75%
32 HAM	7.1年	0	1	1	0	1	1	1	0	12 75.00%
33 YYM	9.3年	0	1	1	1	2	1	1	1	14 87.50%
34 HMM	12.6年	1	1	1	1	1	1	1	1	16 100.00%
35 MSF	7.1年	1	1	0	1	2	0	1	0	11 68.75%
36 JIF	10.4年	1	1	0	1	0	1	1	1	14 87.50%
37 YTF	7.1年	1	1	0	1	0	0	1	1	12 75.00%
平均										13.50 84.38%

注)0=○●▽、1=●○▽、2=○●▽、L=○●▽を指す。各○は低い音を●は高い音を示す。▽は助詞の低音を、
▼は助詞の高音を表す。

早い段階で切り換えられるようになった KOF に焦点を当てる。表 11 から表 14 までは、HTM における 1、2 回目別の切り換え状況を示し、表 15 から表 18 までは、KOF における 1、2 回目別の切り換え状況を示している。

まず、HTM については表 11 と表 12 における 1 回目の読み上げ時に、移住後 3 ヶ月目と 12 ヶ月目の時点で、勝山弁発話において、移住先ア (○●▽) を発話し、それに対応置換させた東京弁発話において母方言ア (●○▽) を発話する認識上の逆転現象

が比較的多く確認される。具体的に確認すると、まず、3 ヶ月目の勝山弁発話時 (表 11) に「胸」の単語レベルで○●、「音、胸」の句レベルで○●▽の移住先 (東京式) アを発話したのに対し、3 ヶ月目の東京弁発話時 (表 12) には「胸」の単語レベルで●○、「音、胸」の句レベルで●○▽の母方言 (勝山式) アを発話する逆転現象が確認される。ついで、12 ヶ月目の勝山弁発話時 (表 11) に「音、胸、夏、石」の句レベルで○●▽の移住先 (東京式) アを発話したのに対し、12 ヶ月目の東京弁発話時 (表 12) には「音、胸、夏、石」の句レベルで●○▽の母方言 (勝山式) アを発話する逆転現象が確認される。

表 11 勝山弁発話時における第 2 類の結果 (HTM) 表 15 勝山弁発話時における第 2 類の結果 (KOF)

1回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0 0.00%
3ヶ月目	1	1	1	2	0	2	1	1	1	1	3 30.00%
6ヶ月目	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	1 10.00%
12ヶ月目	1	1	0	2	1	2	1	2	1	2	5 50.00%
18ヶ月目	1	1	1	2	1	0	1	1	1	1	1 10.00%

(注)表中の色付き部は、東京式ア回答箇所を指す。

1回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	1	2	1	1	1	1	0	1	2 20.00%
3ヶ月目	1	1	0	1	1	2	0	1	1	1	3 30.00%
6ヶ月目	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2 20.00%
12ヶ月目	調査無し										
18ヶ月目	1	1	1	1	0	2	1	2	1	1	3 30.00%

(注)表中の色付き部は、東京式ア回答箇所を指す。

表 12 東京弁発話時における第 2 類の結果 (HTM) 表 16 東京弁発話時における第 2 類の結果 (KOF)

1回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
3ヶ月目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
6ヶ月目	1	1	1	1	0	2	1	1	1	2	20.00%
12ヶ月目	0	1	0	1	0	1	1	1	1	3	30.00%
18ヶ月目	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	10.00%

1回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	2 20.00%
3ヶ月目	0	1	0	0	1	1	1	1	1	0	2 20.00%
6ヶ月目	1	2	0	0	0	2	0	1	0	0	6 60.00%
12ヶ月目	調査無し										
18ヶ月目	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	7 70.00%

表 13 勝山弁発話時における第 2 類の結果 (HTM) 表 17 勝山弁発話時における第 2 類の結果 (KOF)

2回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
3ヶ月目	1	1	1	1	0	2	0	1	1	1	3 30.00%
6ヶ月目	0	0	1	0	1	1	1	1	1	2	2 20.00%
12ヶ月目	1	2	0	0	1	1	1	1	1	2	3 30.00%
18ヶ月目	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2 20.00%

2回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	0	2	1	1	1	1	1	1	2 20.00%
3ヶ月目	1	1	1	2	1	2	1	1	0	2	0 0.00%
6ヶ月目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0 0.00%
12ヶ月目	調査無し										
18ヶ月目	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1 10.00%

表 14 東京弁発話時における第 2 類の結果 (HTM) 表 18 東京弁発話時における第 2 類の結果 (KOF)

2回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
3ヶ月目	0	1	1	1	0	1	1	2	1	1	3 30.00%
6ヶ月目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0.00%
12ヶ月目	0	1	1	0	1	2	1	1	1	1	2 20.00%
18ヶ月目	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1 10.00%

2回目	冬		音		胸		夏		石		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	10点満点
移住前	1	1	0	0	0	1	1	1	1	2	3 30.00%
3ヶ月目	1	1	1	2	1	0	1	1	0	1	2 20.00%
6ヶ月目	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	10 100.00%
12ヶ月目	調査無し										
18ヶ月目	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	7 70.00%

なお、後述するメタ言語との関係については、HTM は 12 ヶ月目の時点で東京語の音調は頭高的 (●○▽) という意識を持っており、このメタ言語が上述した認識上の逆転現象を引き起こしたとは考えにくい。

一方、KOF においては、6 ヶ月目の 2 回目の読み上げ時点で、勝山弁発話時 (表 17) に移住先ア (○●▽) の発話度が 0 %、それに対する東京弁発話時 (表 18) に移住先ア (○●▽) の発話度は 100% を示し、量的にも次節で示す認識上逆転しまう統合レベル (第 4 類) とも異なり、内容的にも完全に切り換えられている。また、6 ヶ月目の 1 回目においても勝山弁発話時 (表 15) の移住先ア (○●▽) の発話度が 20%、東京弁発話時 (表 16) の移住先ア (○●▽) の発話度が 60% と量的にも内容的にもほぼ規範的に切り換えられているといえ、KOF は 6 ヶ月目の段階でほぼ受容レベル (第 2、3 類) における安定した切り換え能力を身に付けたといえそうである。

2. 3. 2. HTM と KOF における統合レベル (第4類) の結果

表 19 から表 22 までは、HTM における 1、2 回目別の切り換え状況を示し、表 23 から表 26 までは、KOF における 1、2 回目別の切り換え状況を示している。HTM においては、ほとんど切り換えられていないため、本節では認識上の逆転現象を含む非規範的な逆転現象が確認される KOF に注目する。まず、第 1 のパターンは、6 ヶ月目の時点で確認される。表 23 と表 24 の 1 回目 (勝山弁発話 : 87.50% 対東京弁発話 : 37.50%)、表 25 と表 26 の 2 回目 (勝山弁発話 : 100% 対東京弁発話 : 31.75%) 共に量的には、切り換えられているといえる。しかし、内容的には、母方言の勝山弁発話に移住先の東京式ア (●○、●○▽) が確認されたのに対して、移住先の東京弁発話には、本来の東京ア第 2、3 類のアクセント (○●、○●▽) が確認されるという非規範的な切り換え現象が確認される。

第 2 のパターンは 18 ヶ月目の時点で確認されるパターンである。表 23 と表 24 の 1

表 19 勝山弁発話時における第 4 類の結果 (HTM)

1回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	1	1	1	0	0	1	1	1	14 87.50%
3ヶ月目	0	0	0	0	1	0	0	1	9 56.25%
6ヶ月目	0	1	2	1	0	0	2	1	10 62.50%
12ヶ月目	2	0			0	2	2	0	10 62.50%
18ヶ月目	1	0			0	0	0		12 75.00%

(注)表中の色付き部は、東京式ア回答箇所を指す。

表 20 東京弁発話時における第 4 類の結果 (HTM)

1回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	0	0	1	1	1	1	1	2	13 81.25%
3ヶ月目	0	0	0	0	1	1	2	2	9 56.25%
6ヶ月目	0	0	1	0	0				11 68.75%
12ヶ月目	0	0							14 87.50%
18ヶ月目	1	10	1	1	1	1	1	1	16 100.00%

表 21 勝山弁発話時における第 4 類の結果 (HTM)

2回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	0	0	0	0	0	0	0		8 50.00%
3ヶ月目	0	0	0	2	0	2			9 56.25%
6ヶ月目	1	0	0	0	0	2	2	0	9 56.25%
12ヶ月目	0	0	0	2	2	2	2		9 56.25%
18ヶ月目	0	00	1	2	0		22		13 81.25%

表 22 東京弁発話時における第 4 類の結果 (HTM)

2回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	1		0	0	0				13 81.25%
3ヶ月目	0			0	0				13 81.25%
6ヶ月目	0	0	0	0	1	1	1		12 75.00%
12ヶ月目	0	0	0		0	2			11 68.75%
18ヶ月目	1	0	0	1	1	0	2	0	12 75.00%

表 23 勝山弁発話時における第 4 類の結果 (KOF)

1回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	1	2	0	0		0	1	1	12 75.00%
3ヶ月目	1	0	0						14 87.50%
6ヶ月目	1	2			1			2	14 87.50%
12ヶ月目	調査無し								
18ヶ月目	1	0	0	1	2	0	2	1	10 62.50%

表 24 東京弁発話時における第 4 類の結果 (KOF)

1回目	針	糸	箸	跡	今	息	肩	海	東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	0	0	0	1	0	1	0	1	10 62.50%
3ヶ月目	0	0	0	1	1	1	0	1	11 68.75%
6ヶ月目	0	0	1	0	2	1	0	2	6 37.50%
12ヶ月目	調査無し								
18ヶ月目	0	0	0	0	0	0	10	0	22 3 18.75%

回目（勝山弁発話：62.75%
対東京弁発話：18.75%）、表
25と表26の2回目（勝山弁
発話：93.75%対東京弁発話：
12.75%）共に量的には、6
ヶ月目と同様切り換えられて

いるといえる。しかし、内容
的には、母方言の勝山弁発話
時に移住先の東京式ア（●○、
●○▽）が確認されたのに対

して、移住先の東京弁発話時には母方言の勝山式ア（○●、○●▽）が確認されるという
認識上の逆転現象が確認される。つまり、6ヶ月目の時点で確認された非規範的な切り換
え現象とは、母方言発話の頭高型（●○、●○▽）においては同様であるが、それに対す
る移住先方言発話においては、6ヶ月目の尾高型（○●、○●▽）から12ヶ月目の平板
型（○●、○●▽）へ変化している。上記の逆転現象を含む非規範的な切り換え現象の推
移に関わる主要因間の相関性については、2. 4. 1. 節で検討する。

また、KOFと同様な認識上の逆転現象を示したJSMは、18ヶ月目の3拍名詞におい
て次のような発話が確認された。つまり、勝山弁発話（表27）において「鏡」「響き」
「袋」「小豆」「百足」の特に句・文レベルで尾高型（○●●▽）もしくは、頭高型（●○
○▽）発話が確認されたのに対し、東京弁発話（表28）においては、「鏡」「響き」「袋」

表 25 勝山弁発話時における第4類の結果（KOF）

2回目	針		糸		箸		跡		今		息		肩		海		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	13 81.25%
3ヶ月目	0	2	0	1	0	2	0	2	1	1	1	2	0	2	1	1	6 37.50%
6ヶ月目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	16 100.00%
12ヶ月目	調査無し																
18ヶ月目	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	15 93.75%

(注)表中の色付き部は、東京式ア回答箇所を指す。

表 26 東京弁発話時における第4類の結果（KOF）

2回目	針		糸		箸		跡		今		息		肩		海		東ア度
	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	単	句	16点満点
移住前	0	0	1	1	0	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	11 68.75%
3ヶ月目	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	2	1	0	1	1	1	12 75.00%
6ヶ月目	0	2	0	1	0	2	1	2	1	2	1	2	0	0	1	2	5 31.25%
12ヶ月目	調査無し																
18ヶ月目	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	1	2 12.50%

表 27 勝山弁発話時3拍名詞における結果（18ヶ月目）

1回目	頭			光			鏡			響き			袋			小豆			百足			鉄			女		
	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文
JSM	2	3	3	2	3	3	0	3	3	0	3	3	0	3	3	1	1	1	0	0	1	2	3	3	0	3	3
HTM	22	22	22	2	3	2	2	3	2	2	3	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	2	3	2	0	3	0
TKM	2	3	3	2	2	2	1	1	1	2	2	2	0	33	2	1	1	1	0	0	1	0	3	3	0	3	0
HSM1	0	3	3	0	3	3	0	3	3	0	3	0	0	3	0	1	1	1	0	0	1	2	3	2	0	3	3
KOF	0	3	0	00	03	00	0	3	0	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	0	3	0	0	0	0

(注)表27、表28の色付き箇所は、勝山式アをO型(平板型)以外で発音し、それに対応置換させ東京式アをO型(メタ意識の表れ)で回答した箇所を指す。

表 28 東京弁発話時3拍名詞における結果（18ヶ月目）

1回目	頭			光			鏡			響き			袋			小豆			百足			鉄			女		
	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文
JSM	2	3	3	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	3	0	3	3	
HTM	2	3	2	2	3	2	2	3	2	2	3	2	2	2	2	1	1	1	1	3	2	2	3	2	1	1	1
TKM	2	3	3	0	3	2	1	1	1	0	3	3	0	3	3	1	1	1	00	00	00	0	3	3	0	3	3
HSM1	0	3	3	0	3	3	0	3	3	0	3	3	0	3	3	1	1	1	0	0	0	0	3	3	0	3	3
KOF	0	0	0	0	00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	00	0	0	00	00

「小豆」「百足」に一貫した平板型（○●●▼）発話が確認された。また、KOF は、18 ヶ月目においては、2、3 拍名詞を通じて一貫した同様な逆転現象を起こしている。上記の点に関しては、横断調査（2. 2. 節）で東京弁発話に平板型（○●▼）発話が多く確認された短期在住者群の 4 名（KIF、HKM、NYM、KFM）を含めて、2. 4. 2. 節で考察を深めたい²⁾。

2. 4. 切り換え能力における考察

2. 4. 1. 横断調査と縦断調査間の共通点と相違点

上述した点から、横断調査時の結果と縦断調査時に見られた共通点と相違点をまとめ、それらの背後にある要因分析を行う。まず、共通点については、横断調査（表 7）の勝山在住者 2 名（SSF、TSM）、短期在住者 3 名（HKM、EYF、TWM）、そして縦断調査の HTM に確認された受容レベル（第 2 類）における母方言アクセント（●○▽）と移住先アクセント（○●▽）間における認識上の逆転現象を挙げられる（2. 1. 節と 2. 3. 1. 節参照）。つまり、本来移住先アクセントである東京式アクセント（○●▽）を母方言と認識し、本来の母方言である勝山式アクセント（●○▽）を移住先アクセントと認識してしまうのである。この要因については、以下に示すように考える。受容レベル（第 2 類）においては金田一（1973）で述べられているように、比較言語学の観点から「同化の法則」（●○▽から○●▽へアクセントの下がり目が後退する変化）が確認されるか否かが焦点になる。しかし、この言語学的認知要因からだけでは、上述した逆転現象を説明できない。

そこで、この現象を説明するために、1. 5. 節で触れた特殊性・一般性という心理学的認知要因も想定する必要性に迫られる。つまり語類間の枠組みの強固性に基づいた上で○●▽が母方言において、量的に劣勢な型であるという特殊性（東京性）に基づき、比較的意識化されにくいために認識上の混乱が生じたものと想定する。その結果、本来移住先アである○●▽を母方言アと捉え、それに対応置換させて本来母方言アである●○▽を移住先アとして発話したものと考えたい。また、切り換えレベルにおいては逆転してしまっている、○●▽の量的な受容には、言語学的認知要因である「同化の法則」も関わっている可能性が高いので、切り換えレベルにおいても、同化の法則と特殊性の要因が相乗的に関与するものと想定する。

次に相違点については、以下の点を挙げられる。横断調査の量的な切り換え状況では受容レベル（第 2 類）と統合レベル（第 4 類）間に差異が確認されなかったが、内容的には認識上の逆転現象が確認されない分、統合レベルの方においてより早く最終段階に達する

ことが予想された(2. 2. 節)。しかし、横断調査の統合レベル(第4類)では確認されなかった認識上の逆転現象が、縦断調査の統合レベル(第4類)ではKOFの18ヵ月目の調査において確認された(2. 3. 2. 節)。つまり、6ヶ月目の段階で母方言の勝山弁発話においては移住先の東京式ア(●○、●○▽)を発話したのに対し、移住先の東京弁発話においては本来の東京式ア第2、3類のアクセント(○●、○●▽)を発話するという非規範的な切り換え現象が確認された。次いで12ヶ月目の段階では、勝山弁発話においては6ヶ月目と同様、移住先の東京式ア(●○、●○▽)を発話したのに対し、移住先の東京弁発話においては6ヶ月目とは異なり、勝山式ア(○●、○●▽)を発話するという認識上の逆転現象が確認された。

このKOFにおける逆転現象については以下のように考えられる。上述した受容レベル(第2、3類)における逆転現象は、特殊性と同化の法則との相乗要因によるものと指摘した。他方、このKOFにおける統合レベル(第4類)の逆転現象には、まず6ヶ月目の時点で語類の枠の強固性という制約の弱さから、型の並行変化の法則による制約を受けやすい状況³⁾を指摘できる。そして、この状況に基づき、より無意識的に受容レベル(第2、3類)における特殊性と同化の法則に基づく移住先ア(○●▽)の統合レベル(第4類)への侵入を許してしまった結果、勝山弁発話においては移住先の東京式ア(●○、●○▽)を発話し、移住先の東京弁発話においては本来の東京式ア第2、3類のアクセント(○●、○●▽)を発話するという認識上の逆転現象が生じたものと想定する。

ついで、12ヶ月目の時点でも「語類の枠の強固性という制約弱：型の並行変化の法則による制約強」という両制約間の相補的な関係と●○▽と○●▽が母アと移住先アの両方において量的に優勢な型であるという一般性に基づき、比較的意識化されやすいために以下に示すようなプロセスでメタ言語の影響を受けやすいものと想定する。

つまり、意識レベルにおけるメタ言語と無意識的な発話レベルにおけるアクセント型との関係から、KOFはメタ言語項目において6ヶ月目と同様、12ヶ月目の時点でも「東京語は平板的」という音調意識を明確に持っており、12ヶ月目に至って、意識レベルにおけるメタ言語と無意識的な発話レベルにおけるアクセント型が一致したといえよう。言い換えると、意識レベルにおけるメタ言語が6ヶ月目の時点で先導し、その後12ヶ月目の時点で無意識的な発話レベルにおけるアクセント型が追随した結果、認識上の逆転現象につながったものと考えたい。

以上本節では、受容レベル(第2、3類)で認識上の逆転現象を起こしたグループと統合レベル(第4類)で認識上の逆転現象を起こしたKOFに焦点を当て、これらの現象を引き起こしたと考えられる各脳内主要因に焦点を当て、その主要因間の相関性を探っていく。

た。さらに、これらの脳内主要因間と脳外主要因（接触要因、在住年数等）間における相関性については、3節で検討する。

2. 4. 2. 東京弁発話に現れた平板型アクセント機能の複合的解釈

本節では、東京弁発話に表れた○●▼（平板型）に着目する。横断調査時における短在者群の4名（KIF、HKM、NYM、KFM）における○●▼も縦断調査におけるKOFとJSMで確認された○●▼も共に東京語の音調に対するメタ言語と言えよう。なぜなら、JSM以外の4名においては表2（1. 3. 2. 節）のメタ言語（東京語に対する音調意識）を問う項目において、○●▼が東京語音調的であると回答しているからである。また、JSMにおいては、メタ言語の項目では○●▼が東京語の音調的であるという回答は見当たらないが、表27の勝山弁発話では○●●▼型以外を発話し、それに対して表28の東京弁発話では○●●▼型を発話するという安定した傾向が確認されることから、東京語に対するメタ言語の表れであると判断した。

又、インフォーマントの内省からは、東京語の音調に対して「全体的に抑揚がない」とか「語尾を上げる」等の報告を受けており、音声メディアから耳にする音調や首都圏在住者の話し方における超文節的要素の中でも特に文音調から平板的な要素を強く感じ取っているものと考えられる。この点については井上（1998）で平板アクセントの音響パターンは文を自然に発音した時のパターンにも似ているとされている点からも裏付けられよう。つまり本研究の統合レベルの切り換えレベルにおいて、前節でも触れたように○●▼や○●●▼が一般性を持つが故に意識化されやすく従って東京弁は平板的というメタ言語の干渉を受けやすい傾向が強いと言えそうである。

以下では、先行研究で述べられている平板型アクセントの機能と上記で確認された移住者の東京弁発話に現れた平板型アクセントの機能とを関連づけて考えてみたい。柴田（1990、1995）によると、日本語（東京語）から外来語を除いた在来語において、最も多いアクセント型は平板型で約50%を占めるとのことである。この点に基づいて、これまで述べられてきた東京語に現れた平板型の機能に対する解釈をまとめると以下の2点になる。

- (1) 理解語彙に対する類推アクセント（秋永1999）
- (2) 専門化アクセント（井上1994）

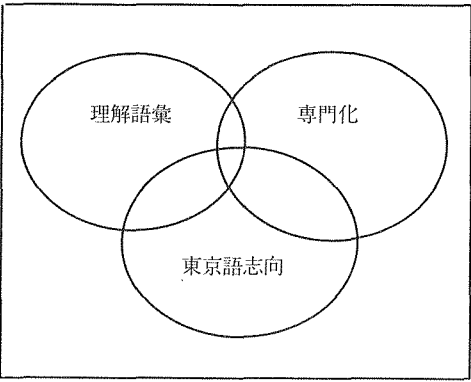
しかし、本研究の移住者における東京弁発話で確認された○●▼は、次に示す第3の解釈に相当するといえよう。

- (3) 東京語を志向してのアクセント

この解釈については田中（1998）による首都圏西部域の高年層における動向にも対応し

ている。田中（1998）においては、多変量解析を使った分析の中で、2 拍名詞第 2 類の「北」「人」「寺」に現れた平板型は、共通語アクセントを指向した結果であるとしている。この 3 点の解釈をまとめると図 3 のようになる。

つまり、日本語（東京語）アクセントにおいて、平板型が量的に半分を占めるという無標性に基づき、馴染み度や使用頻度の低い理解語における平板型発話、仲間間の連帯意識を高めたり、集団への帰属意識を測ったりするための平板型発話、そして首都圏への移住者や首都圏周辺の在来者が、東京語を志向しての平板型発話という各々独自の機能を形成しながらも、共通に機能する部分も持ち併せている複合的機能モ



日本語の半分は平板語

図 3 平板型アクセント機能の複合的解釈

表 29 東京弁発話時における第 3 類（使用頻度が低い語）の結果（18ヶ月目）

	斧			瓶			櫛			糠			蜜		
	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文
JSM	1	1	1	0	2	00	0	2	0	0	0	0	0	0	0
HTM	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1
TKM	1	1	1	0	2	2	1	1	1	0	0	0	1	1	1
HSM1	0	0	22	0	2	2	10	12	22	0	0	0	0	2	2
KOF	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2

(注)表中の色付き部は、東京式ア回答箇所を指す。

表 30 東京弁発話時における第 4 類（使用頻度が低い語）の結果（18ヶ月目）

	粟			臼			笠			絹			奥			麦			数			松		
	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文	単	句	文
JSM	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
HTM	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
TKM	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
HSM1	01	22	21	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	
KOF	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

デルを想定し得る。本稿のインフォーマントで言えば、横断調査、縦断調査を通じて JSM 以下 4 名に表れた○●▼や○●●▼は、(3) の解釈にあてはまりそうである。一方、18 ヶ月目の縦断調査における表 29 の「糠」、表 30 の「粟」「臼」のような使用頻度が低いと考えられる語に確認される平板型は、(1) の理解語彙に対する類推アクセント機能と (3) の東京語を志向してのアクセント機能が、複合的に作用した結果現れたアクセント型であると言えそうである。当然、(1) から (3) までの全ての機能が複合的に作用した結果現れる平

板型もあり得るであろう。

3. まとめ

以上、母アクセントと移住先アクセント間の切り換えを行う際に生じた認識上の逆転現象を含む非規範的な切り換え現象に関わる主要因間の相関性と移住先アクセントである東京弁発話時に確認された平板型の複合的なアクセント機能について検討してきた。最初に、前者の認識上の逆転現象を含む非規範的な切り換え現象に関わる脳内主要因間における相関性に加えて各脳外主要因をも考慮してまとめると、表 31 から表 33 に示すようになる。

表 31 受容レベル（第 2、3 類）で逆転現象を起こしたグループにおける主要因間の相関性

脳内主要因						脳外主要因		
言語学的認知要因		心理学的認知要因						
同化の法則	型の並行変化の法則	語類の枠の強固性	特殊性	一般性	メタ言語	間接的接触	直接的接触	在住年数
○	△	○	○	×	×	△	○	○

注) ×→△→○の順に相関性が強まることを示す。

表 32 統合レベル（第 4 類）で非規範的な切り換え現象を起こした KOF における主要因間の相関性（6ヶ月目）

脳内主要因						脳外主要因		
言語学的認知要因		心理学的認知要因						
同化の法則	型の並行変化の法則	語類の枠の強固性	特殊性	一般性	メタ言語	間接的接触	直接的接触	在住年数
○	○	×	○	×	×	×	○	○

注) ×→△→○の順に相関性が強まることを示す。

表 33 統合レベル（第 4 類）で逆転現象を起こした KOF における主要因間の相関性（12ヶ月目）

脳内主要因						脳外主要因		
言語学的認知要因		心理学的認知要因						
同化の法則	型の並行変化の法則	語類の枠の強固性	特殊性	一般性	メタ言語	間接的接触	直接的接触	在住年数
×	○	×	×	○	×	×	○	○

注) ×→△→○の順に相関性が強まることを示す。

まず、表 31 は受容レベル（第 2、3 類）で逆転現象を起こしたグループにおける主要因間の相関性を示している。表 31 で示す×印はグループ全体に渡って該当要因との相関性がほぼ認められないことを表し、△印はグループ内の個人において該当要因との相関性が認められない語彙が存在していることを指している。また、○印はグループ全体に渡って該当要因とは相関関係にあることを示している。

すなわち、このグループの受容レベル（第 2、3 類）上での認識上の逆転現象を引き起こした複合要因内の脳内主要因においては、2. 4. 1. 節で触れたように語類の枠の強

固性に基づいた特殊性と同化の法則の複合要因を挙げられる。また、脳外主要因においては、移住前段階の間接的接触要因よりも移住後の直接的接触に基づく在住年数の要因の方がこの逆転現象に関わっている割合が大きいといえそうである。その理由としては、2.

1. 節の表7において、逆転現象を引き起こしている人数の割合が、勝山在住者群の1.0%から短期在住者群の30.0%に増加している点を挙げられる。

つぎに、統合レベル（第4類）で逆転現象を含む非規範的な切り換え現象を起こしたKOFの6ヶ月目と12ヶ月目の状況における主要因間の相関性については表32と33に示されている。両表においてはKOF個人に焦点を当てているので、×印はKOFが発話したほぼ語彙全体に渡って該当要因との相関性が認められないことを表し、△印はKOFが発話した一部の語彙において該当要因との相関性が認められない語彙が存在していることを表している。また、○印はKOFが発話したほぼ語彙全体に渡って該当要因との相関性が認められることを表している。

以下では、6ヶ月目と12ヶ月目において、KOFの統合レベル（第4類）における内容の異なる逆転現象を含む非規範的な切り換え現象を導く際に、共通して関わっている複合要因群と異なる複合要因群別に検討を加える。まず、6ヶ月目と12ヶ月目に共通する脳内主要因群は、語類の枠の強固性における制約の弱さに対応した型の並行変化の法則における制約の強い点である。また、2点目は脳外主要因において、間接的接触より直接的接触要因に基づく在住年数の要因の方が、より相関性が高くなっている点である。

一方、相違点は、6ヶ月目の時点（表32）では、脳内主要因において特殊性と同化の法則の複合要因が関わっていたのに対し、12ヶ月目の時点（表33）では一般性に基づく東京語は平板型であるというメタ言語要因の影響が関わっている点が異なっている。そして、この相違点が6ヶ月目と12ヶ月目の逆転現象における内容の違いを生み出したものといえよう。

また、東京語の半分は平板型であるという無標性に基づき、移住先の東京弁発話で確認された平板型アクセントには、以下に挙げる3つの機能が複合的に存在しているといえる。

- (1) 理解語彙に対する類推アクセント
- (2) 専門化アクセント
- (3) 東京語を志向してのアクセント

本研究の移住者における東京弁発話で確認された平板型アクセントは、(3)の解釈に相当するといえるが、馴染み度が低い語には、さらに(1)の機能も関わっている可能性がある。また、実際の発話においては(1)(2)(3)の全ての機能が関わる平板型アクセントも想定し得る。

4. 今後の課題

認識上の逆転現象を起こす人と起こさない人、早く切り換えられるようになる人とならない人等の個人差が生じる理由と切り換え能力における最終段階に至るまでの推移についても考察が必要であろう。それについての心理言語学的な観点からの分析は別稿で行う予定である。

【注】

- 1) 在来者のアクセント変化を考察する際にも、当然心理学的認知要因も考慮する必要があり、また移住者のアクセント変化を考察する際にも、後述するように言語学的認知要因も考慮する必要に迫られる場合があり得る。ここでは、以下で議論を展開しやすくするために、用語を整理することを旨として各認知要因と認知要因以外の要因の区分を設定した。
- 2) 「東京語は平板的」という音調意識を持っていると認める基準としては、①メタ言語項目での平板型の回答、②勝山弁発話で平板型以外の発話に対する東京弁発話での平板型発話、の2点を挙げられ、その内のどちらかの条件を満たしていれば、「東京語は平板的」という音調意識を持っているとみなした。
- 3) この心理学的認知要因である「語類の枠の強固性」と言語学的認知要因である「型の並行変化の法則」は、相補的な関係にあると言える。「語類の枠の強固性」の制約が強く「型の並行変化の法則」の制約が弱い例は、1. 5. 節で触れた勝山在住者における第1・4類の関係が相当する。

【参考文献】

- 相澤正夫 (1984) 「アクセント変化の要因」『日本語学』3-11
- 秋永一枝 (1957) 「アクセント推移の要因について」『国語学』31
- 秋永一枝 (1999) 『東京弁アクセントの変容』笠間書院版
- 井上史雄 (1994) 『方言学の新天地』明治書院
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波新書
- 金田一春彦 (1973) 「比較方言学と方言地理学」『国語と国文学』6月号
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 佐藤亮一 (1988) 「福井市およびその周辺地域におけるアクセントの年齢差、個人差、調査法による差」『方言研究法の探索』秀英出版
- 真田信治 (1982) 「アクセント型による語彙分類」『図説日本語』角川書店
- 真田信治 (1993) 「対応変換 - 関西アクセントを事例として -」『国際化する日本語 話し言葉の科学と音声教育』クバプロ

- 柴田武 (1958)『日本の方言』岩波新書
- 柴田武 (1990)「外来語におけるアクセント核の位置」『現代語方言の研究』明治書院
- 柴田武 (1995)『日本語はおもしろい』岩波新書
- 下山栄子 (1987)「大阪方言話者の関東への移住による言語変化」『埼玉大学教養学部言語学報告』5号
- 杉藤美代子・南不二男 (1981)「大阪のアクセント」「東京のアクセント」『大都市の言語生活－分析編－』三省堂
- 田中ゆかり (1998)「アクセント変化の方向性－首都圏西部域高年層を中心として－」『第12回日本音声学会全国大会予稿集』
- 長友和彦 (1993)「日本語の中間言語研究－概観－」『日本語教育』81号
- 西村拓 (1990)「移住と言語変容」『地域言語』2号 天理地域言語研究会
- 日比谷潤子 (1988)「バリエーション理論」『言語研究』93
- 平山輝男 (1953)「福井縣嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83
- 平山輝男編 (1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版
- 堀口純子 (1980)「筑波研究学園都市における新旧住民の交流とアクセント」『文芸言語研究 言語編』5、7
- 山口幸洋 (1988)「垂井式諸アクセントの性格」『国語学』155集
- 余 健 (1997)「移住先アクセントと発話・知覚能力における発達推移」本文編・資料編
大阪大学大学院文学研究科1997年度修士学位論文
- 余 健 (1998)「移住先アクセントの受容・統合能力に関わる主要因間の相関性－首都圏への移住者を対象にして－」『第66回日本方言研究会発表原稿予稿集』
- 余 健 (1999)「母アクセントと移住先アクセント間における切り換え能力」『日本学報』18

【付記】

本稿の調査を行うにあたって、福井県立勝山高校の加藤守男、前田良宣両先生には、インフォーマントの選定の際に便宜を図って頂きました。紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。また、数度に渡る単調な調査にも関わらず、忍耐強くご協力下さいましたインフォーマントの皆様にも、同様に感謝申し上げます。本稿は1998年度春季方言研究会（於白百合女子大学）で発表したものを加筆訂正したものです。席上、貴重なアドバイスを下さった皆様方にお礼を申し上げます。

よ けん（博士後期課程学生）